

緑色閃光（5）

アランのフローターはニモ＝モントジュニアスのターミナルに入った。ルガージ＝セイロから600キロメートルの距離で、クァンターの移動距離としては近い部類に入る。

ナルオンにおける2大強国の一つであるスプレアの首都で、聖都とも呼ぶ。政治の主体となる都市だが、10年前までクーデターを含めた内部抗争があったために建物や道路の類いはほぼ新しく計画している。故に歴史があるにも関わらず真新しい印象がある。構造は政治中枢をつかさどる行政区を頭とした、翼を広げた鳥の形状を模している。骨の部分は大通りとなり、翼の部分は住居区域となり尾の部分は公園が広がる。開発は内部抗争後、最優先で進めたため、住居区域内に公文書館等の旧態の公共施設が設置してある等ちぐはぐな面がある。結果として一般の利用者が利用しやすい環境が整っていて、知識層が集まりやすい土壌もある。周辺は人工湖が囲み、古い町並みが残っている。

聖都はフリーのクァンターを含め、行き交う人々への審査は緩く一種の観光都市として成立している。人々もフランクな人間が多い。

アランのフローターはターミナルのフローター格納庫に入り、空いている場所に止まった。タラップが降りた。アランがケースを持って降りてきた。

係員が仕事を求め集まってきた。クァンターとしてはいつもの調子で、紙幣と端末を通したカードと引き換えに仕事を与える。予約していたホテルへ運ぶ荷物の輸送やフローター自体の預かりが今回のメインだ。カードと紙幣を受け取り、解散していく。

アランは係員の一人を捕まえた。「聞きたい内容がある」

係員は何だとアランの方を向いた。

「聖都内にあるマーキー＝マーキーという酒場を探してる。地図で見ても詳細がわからないんだ。住所を知っているか」

係員は面倒臭そうな表情をした。「変わった名前だな」

「知らないか」

係員は首を振った。「いや、俺は知らない」

アランはため息をついた。地図に載っていない場所とは、スラム街にでもある場所なのか。

「土地計画で整理したのが10年前だからな、計画外になった場所が地図に載ってないってのはよくあるんだ。大まかな区域で聞けばわかるんだが、地区はわかるか」

「低層住居区域って聞いている」

「低層って言っても細切れだからな、悪い。分からない」

「引き止めちまってすまない」アランは係員の肩を軽くたたいた。

係員は去っていった。

格納庫を抜け、ロビーを出た。日が傾き始めていた。

再開した都市だけあって、白を基調とした超高層ビル群が規則正しく敷き詰めた区画にブロックをはめ込む感覚で埋め込んである。並木で区切った用途別の道路が区画の間を切り刻み、車や人々が行き交っている。商業区域の先には曲線と直線が入り混じったオブジェで飾った広場が見える。余りにも白が重なっているため、幻惑を覚える程だ。

アランは端末を取り出し、観光案内所へ商業ブロックを歩いていく。アクリルガラスのショーウィンドウには売り込みをする商品が着飾って並んでいる。大通りを曲がった。完璧な計画によって作った作品は無駄がない分遊びもなく、付け足す気にも外す気にもなれず一度見ただけで満足し、何度も感覚に取り入れたいと考えなくなってくる。聖都も例外なく、街を外れても色がなく大通りと同じビルが存在するだけで面白くない。むしろ同じ場所で迷うのではと不安がよぎってくる。端末を見ながら端末に映る目的地のビルの前に来た。中に入り、ロビーの脇にある案内所に足を踏み入れた。

案内所は机が乱雑に置いてあり、観光案内や立体地図が浮かび上がっている。客は誰もいない。年老いた男が奥で面倒臭げにキーボードを打ち込んでいて、もう一人の男が荷物の整理をしている。

アランが中に入ってきた。

年老いた男は音でアランを検知した。「いらっしゃい」

アランは年老いた男に近づき、ケースをカウンターに無造作に置き、開け口にある生体認証装置に手を触れた。認証が完了し、ケースが開いた。中には希少金属のインゴットが入っている。

年老いた男は手袋をしてインゴットを手に取り、確認した。「最近レートが上がっててな、取り分は1割でいいか」

「十分だ、紙幣は10万バルを200バル紙幣で頼む」

アランの言葉を聞き、満足げな笑みを浮かべた。

「ついでだが低層住居区域にマーキー＝マーキーという酒場があると聞いた。場所を教えてください」

「低層住宅区域ですか、区画整理していない場所ですからね。勝手に営業しててもバレないんで何がなんだか分からないですよ」

アランは係員と同じ返事に呆れを覚えた。「なら低層住宅区域を教えてください、地区に入って調べろ」

年老いた男は眉をひそめた。「調べるって、貴方は外の人間だろ」キーボードをたたいた。ニモ＝モントジュニアスの立体地図が浮かんだ。中央から外れた、区画整理をしていない場所が断片的に映る。

もう一人の男が近づいてきた。細かい傷が顔面に切り刻んである。「何を探してるってんだ」

「マーキー＝マーキーって酒場だ」

アランの言葉に、男の眉が一瞬動いた。「誰から聞いた」

「サイアスって、クァンターの男だ」

男は淡々と手元にあるキーボードをたたいた。立体地図に住所と場所が映った。

年老いた男は驚いた。「知っているのか」

「クァンターが紹介する酒場ってのは、内部抗争のねぐらにしていた場所が多い。正確ではないが、

アジトの中で著名な場所だ。行けば情報の一つくらいは手に入る」

「分かった、仕事がかかっているんでな」

年老いた男がカードの打ち込みを終えた。

男は金庫を開け、中に入っている紙幣の束をケースに入れ始めた。

「取り分は予め引いておくぞ」

「親切だな」

「丁寧さが売りだよ」

男は札束を入れ終わると、年寄りからカードを受け取って眺めた。クォーターのナンバーが刻んである。

「おまけだ」打ち込んでデータを書き込み、ケースを閉じて入口の生体認証装置に重ねた。カードを通してデータのコピーがかかりロックがかかる。アランにカードを差し出し、ケースをカウンターの上に置いた。認証装置は開閉に必要なだけでなく、奪われた場合の「対処」が内蔵してある。持ち主が操作をすれば、奪った本人が運搬の乗り物ごと消し飛ばす仕掛けだ。失った現金と巻き込みで発生した被害はケースにかかっている保険と、奪った人間の財産と命で補填する仕組みになっている。

「ありがたいな、次からひいきにして仲間に紹介してやるよ」アランはカードとケースを受け取り、紙幣を差し出した。

男は紙幣を受け取った。「やめとけ、刑務所の飯は食いたくない」

アランは背を向け、出ていった。

「なんでまた、知ってたんだ」年老いた男が尋ねた。

「元クォーターだ、店があるのは知っている。今何をしているかまでは知らんがな」

男は奥に戻っていった。

アランは案内所を出るなり、端末を起動して地図を映した。現在地と周囲の位置とを照合しながら通りを進んでいく。次第に計画都市の区画から外れ、掃きだめと化した低層住宅区区域の前に来た。

部屋をきれいにする一番手っ取り早いのが、散らかっている物を押し入れに押し込む方法だ。区画整理も例に乗っ取り、なじめない者達を町の隅へと追い込んだ。急速な計画のしわ寄せともいえ、ウパウンチにもあるスラムの形相を見せている。スラムが治安を含めたライフライン諸共隔離しているのに対し、低層住宅区域は単になじめない者達の集合体でしかなく、古い街をそのまま残した程度でしかない。故に治安の問題もなく、誰でも中に入って施設を利用できる。

アランは中に入り、店の看板を探し回った。新鋭の街とかけ離れた街は入り組んでいて、日が陰っている現在の時刻と相まってトリックアートの形相を見せている。地図も当てにならず、気づけば同じ場所に立っていた状態が何度も続く。地図に限らず場所とは近くに来れば来るほど迷いやすい。行きかう人に話を聞き出し、酒場らしき場所の前に来た。

既に日が暮れていた。街灯が闇を照らしていて、昼程ではないが地方都市の大通り並みの明るさはある。夜間は気温が下がるにも拘らず酒場を含め懐かしさを求める人々で行きかっている。気温が雑居ビルが集まっている場所で、地下への階段が続いている。看板もなく、一見して地下牢への入り口にしか見えない。

アランは意を決して中に入った。失礼なら素直に退室すればいいだけだ。階段を下りた先に木製のドアがあり、手をかけて開けた。ドアの装飾の割には力を入れずして開いた。

10平方メートルほどのスペースに、地下牢を回収した酒場がある。木製の粗末なテーブルと椅子には客が座っていて、奥には古めかしい酒瓶が並んでいる棚の前で、マスターらしきひげを生やした男がカウンター席に座っている客の対応をしている。

「すみませんが会員制です」男が寄ってきた。屈強なシルエットをしていて、即座に用心棒として雇い入れたのだと分かった。

「勘違いなら出ていく。店の名前を聞きたい」アランは男に尋ねた。

「マーキー＝マーキーだ。分かったなら出て行ってくれ」

「紹介なら入れるか」アランはズボンから財布を取り出し、コインを出して男に差し出した。

男はコインを受け取って眺めた。白銅製で南十字座の刻印がある。「拾ったのか」

「サイアスってクォーターから受け取った。仕事があるから来いって聞いてな」

男はコインを握り、アランに殴りかかろうとした。

「やめろ」奥からマスターの声がした。男は動きを止めた。

マスターはアランをにらみつけた。「黒髪のクォーター、アランか。サイアスから話を聞いている。来い」

アランは男を払いのけた。

「分かっているなら殴り掛からなくてもいいのによ。客の対応が悪すぎだ」

「中に入った奴は客ではない。等しく人間だ」

アランはカウンター席に向かった。「モヒートを、なければダイキリを頼む」

マスターはタンブラーを取り出し、氷を入れると酒瓶を持ってラム酒を注ぎ始めた。

「サイアスから何と」

「住居と仕事のあっせんだ。お前向けに仕事をしてほしいと頼み込んだ奴がいてな」

「暴徒鎮圧か」

「いや、お使いだとよ」マスターはミントの葉を入れてすりつぶしつつ、席に目をやった。アランもマスターの目を追った。

男が座っていた。白く胸まである髪を垂らして顔つきが見えない。薄汚れた服装で不器用に肉を切っている。静脈の浮かぶ手の肉付きからして、中年か近い年齢だと分かった。

「出来たら運んでくれ」アランはマスターに声をかけ、男の元に向かい対になる形で席に座った。

男は顔を上げてアランを見た。男の顔にはしわが無数に走っている。明らかに老人だ。「はじめまして、かな」

「かしこまった挨拶は不要だ」老人はしがれた声を発した。「アラン＝グレイザルか。初めて見るが随分な優男だな」

「優男で結構だ。ちょうど仕事を求めていると言って駆け寄った次第だ」
年寄りも切った肉を口に運んだ。噛みながら隣においてある端末を手に取り、操作した。アランは端末を見た。クエンターが保有している端末とよく似ている。書類と身分のデータが浮かび上がった。身分は王族の一人で、城に関して身の世話をする職分だ。名はミリガン＝フォボスと記述してある。

「王族が何の依頼だ」
老人は肉を飲み込んだ。「君はニウテラから脱出したクエンターの一人なのは話題になっているよ。他の奴もいると聞くが、話をもちかけるにしても所在が分からなくてな」

「教えてやろうか」
「いや、目の前にいるから必要ない」老人はワインを手に取って飲んだ。酒場の客にしては丁寧な飲み方をしている。作法がしみ込んでいる貴族階級の間人だ。「話というのはニウテラの状況を知りたいという物でな。まあ話題についていち早く正確な情報を聞きたいという好奇心だよ」

「なら今すぐ話してもいい」
老人は笑った。「私を相手にしても仕方なからう、興味を持っているのは上だよ。話を聞かんとしたいと探し回った結果、サイアスを通して君がいると聞いて興味がわいた。無論、君の実績も含めて君に純粋な興味がわいたのもあるがね」

アランの手元にモヒートが置かれた。「依頼内容は」
「明日、銀行に指定した口座から金を下ろし、迎賓館にて王への貢物として納めろ。以後は待機すればいい。謁見の許可が下り使いが現れる」老人はカードをアランに差し出した。

アランはカードを受け取った。話を求めているのは王だと分かった。「ニウテラの土産話をするだけでいいのか」
「俺にも詳細は分からん。話をしたいと言っていた。立場からして出向いて話をする訳にいかん。故に形式としての手続きが必要になる」

「立場ってのは面倒だな」
「同じだよ」老人は笑った。立場や肩書とは時に人を縛り付け自由を奪う一方、なければ動けない状況もある。時に隠し、時に表に出すのがいいが決め時が分からないので困り果てるのが常だ。

老人は端末を操作した。口座の番号と指定した銀行の地図が映った。
「額は」アランはカードを取り出し、老人に差し出した。
「面倒なら全額下ろせ。報酬は連中が取った額の残りだ」
「ずいぶんと寛大だな」

老人はカードを受け取り、端末と重ねた。データをコピーした。
アランはモヒートを喉に流し込んだ。清涼なミントの味と酒の味が混ざって喉へ流れた。
老人はアランにカードを差し出した。
「王様ってのは随分拝観料の高い展示物だな」
老人はアランをにらんだ。

アランは苦笑いをした。「冗談だよ、冗談。保証金だってのは分かる。だから返ってきた時の金の扱いを聞いただけだ」
「お前が気にする必要はない」老人は肉を切り分け始めた。
アランの目から見て、年寄りが口にする肉の分量に見えない。

「ニウテラの情勢を知っているか」
「俺や友人が脱出した後、ガルキアが保護したって話まで聞いてる。後は知らない」
「調べてもいないのか」
「確かに取り戻したいが、一介のクエンター如きで解決できる問題でもない。今時、街を開放する伝説の勇者なんて流行らねえよ」

老人は笑みを浮かべ、フォークで肉を突いた。「情勢は把握しているんだな」
「無謀は短命の証、臆病は長寿の秘訣だ。クエンターなら誰でも頭の底に染み込んだ言葉だ」
「何も食わんのか」老人は突き刺した肉を口に運んだ。
「今日は話をつけるだけ、飯はホテルでも食べる」アランはモヒートを飲み干し、紙幣を出してカウンターに向かった。マスターの見える位置で紙幣を置いた。

「また来るのか」
「報告にな」アランは店を後にした。
「噂に違わず変わった男だ、本当に計画にとって重要な駒なのかね」マスターはドアが閉まったのを確認した。

「自覚があろうがなかろうが関係ない。使命は仕事として果たしてもらおう。でなければ作った意味がない」老人は若々しい声を発した。
「非情だな」

老人はマスターの言葉に何も返さず、黙々と切り分けた肉を食べていた。
アランは帰り道に黒く半透明なカードを取り出した。中から青い光が点灯している。仮に光が消えたとしても目的も目標もない以上動けない。無意味さ愕然とした。

翌日は快晴で、多くの人々が新鋭の建物を行き来している中にアランがいた。雨季に入っているフォルタジアスやニウテラの近辺区域と異なり、雨は一年を通して最も少ない季節となっている。気温は1年を通して変化がないが、計画した設備により緑の少なく大通りでブロックごとに立ち並ぶ超高層ビル群により暑さが際立っている。ビルに立てかけてある広告を兼ねた気温表示は27度となっている。

アランは暑さの中、パックの水を飲みながら地図を頼りに銀行のあるビルに向かった。大通りを曲がり、『Banco』と書いてある看板のあるビルの前に来た。指定した銀行だ。入口に来ると自動ドアが開いた。

デパートの売り場の1区画とも言えるほどのスペースに、幾つもの椅子とテーブルがある。床は大理石製で吹き抜けの天井まで写り込んでいる程に磨き抜いてある。奥にはカウンターがあり、スーツを着た銀行員が周囲を見回している。周辺には幾重も映像が浮かび上がっている。金利や為替レート、

経済情勢が書き込んである。

アランは経済情勢を示しているウィンドウに目をやった。スプレアが雇兵の招集を始めた為にレートが上がっているニュースを見かけた。大規模な戦闘に入るか、正規兵の募集か定期訓練の相手を募集したかになる。昨日の酒場でした話を思い出し、ため息をついた。セコク地道に稼ぐのが一番無難だ、物騒な展開になって命がけの依頼が飛び交う状況にならないのを祈るしかない。カウンターに向かった。「口座から金を下ろしたい。カードに入れてくれ」

「解約ですか」

「いや、下ろすだけだ。口座は後で使う」アランは2枚のカードを差し出した。銀行員はカードを受け取った。カウンターの刻印がある。

銀行員は疑念を持ちながらも、カードを読み込んだ。口座のナンバーと署名が浮かび上がる。署名には『ミリガン=フォボス』と名前が書きこんである。口座の名前にも矛盾はなく、登録時の経歴とも一致している。

もう一枚のカードは現金のデータが何も入っていない、空の内容だ。所持者としてアランの身分が重なって映った。経歴を確認し、アランの方を向いた。カウンターとなれば多額の金を融通するのは当然と判断した。「カウンターならインゴットに変えるのも選択に入りますが」

「インゴットだと渡すのに面倒だ。取引に物を言うのは現金だ」

銀行員はアランを怪しみながら作業を行った。口座を開き、入っている現金を確認した。8000万バール以上入っていて、移行の手数料を入れると端数を抜いて丁度8000万バールになる。余りに計算ずくな内容に怪しんだが、違法性は何一つとしてないので看過して口座の移行を行った。空のカードに口座の金を移し終えた。

アランの前に映した口座の額と手数料の明細が映った。丁度8000万バールの金で、目に入れても気に留めなかった。額は重要ではなく、下ろした金を納めるのが重要だからだ。

銀行員はカードを手に取り、アランに差し出した。「ご利用ありがとうございました」

アランは何も言わずに銀行を去り、出ると端末を開いて迎賓館の位置を確認した。翼を開いた鳥を模した形状の都市の地図の中で、首の部分を示している。王宮を始めとする執政区域の入口に当たり、迎賓館の前にはゲートがある。何一つとしてパスがないのに不安を覚えた。あるとするならさきほど下ろした8000万バールの金だけだ。通りを歩いていけば日が暮れてしまう。周辺を見回すと地下鉄の入口があるのを見つけ、入っていった。

改札口はホテルのロビーと錯覚する広さと敷き詰めた白いタイル、過剰なまでの明るさを誇る発光ダイオードの影響で清楚さと豪華さが重なっている。多くのビジネスマンが行き交っていて、所々に複合体の警備隊員とスプレアの警察官がうろついている。

アランはゲートを通り抜けた。ゲートは体をスキャンする装置となっていて、読み取った体のシルエットや体温、虹彩等の情報から身分を割り出し口座から引き落とすシステムになっている。改札口を抜けてプラットフォームに来た。地下の密閉空間のおかげで金属とオイルの匂いが鼻につく。人々が待機している中、丁度列車が入り込んできた。

列車はタイヤで動いている。運転手がいないので自動制御に見えるが、実際には万が一の事態に備えて遠隔操作となっている。人工知能は人の命を預けるにはまだ信用ならない存在だ。窓を通して人が見えるが空いている。停止線の直前で停止し、ドアが開いた。次々と人が降りて来る。

アランは人々が降りきった段階で乗り込んだ。座席は空いていたが座らずに立ったまま手すりをつかんだ。迎賓館まで遠くはない。座っても得はないと判断した。

列車が動き出した。2、3分ごとに駅に止まっては人を吐き出し、取り込んでいった。

30分程度経った頃、ドアの前に迎賓館前の表示が映り停止した。

アランは列車を降り、改札口のゲートを通った。何もなく階段を登り地上に上がった。

地上は日の光が照りつけていた。周囲は庭園となっていて、人工的に整った芝生の上に花が咲いている。先には白と青を貴重とした、刑務所と間違える程の高さの直線で構成した壁と埋め込んだ門がある。美しく見えるが自然のまばらさがなく、直線の集合体の趣きがある。ゲートと対する方向には自分がいた商業区域の高層ビル群が見える。

アランは門に向かった。予めパスをもらっておけば良かったと後悔した。高が口座一つで通す程に甘くはない。

門は立体映像で実在しない。開きっぱなしの状態になっている。代わりに視認できない赤外線が幾重も走っていて、通ればセンサーが反応し詰め所にいる警備隊とロボットの複合集団が駆けつける仕様だ。

アランは門の前に来た。脇に受付があるのに気づいて向かった。受付には警備隊員が待機している。

「すまない、迎賓館に用があるんだ。中に入れませんか」

「身分証明を」

アランはカードを取り出し、警備隊員に差し出した。警備隊員はカードを読み取り機の上に置いた。アランの身分が浮かび上がった。

警備隊員は身分を確認し、キーボードを突いた。身分に署名が入った。立体映像が消え、カードを手にとったアランに差し出した。「お入り下さい。地図の案内に従い、ご見学下さい。迎賓館を含めた主要施設はオフィスとなっていますので外観のみで内部の見学は出来ません。また再入場の際は再び登録して下さい。開園時間や現状の確認は」

「中に入っていいの？」

「先程お話しした通り、外観のみで」

「門から先の立ち入りは」

「公園として開放しています」

「分かった、ありがとう」アランはカードを受け取った。執政区画は公園として開放しているのだと分かった。

公園として開放している執政区域は、曲線と白を主体とした先鋭とも美術品のオブジェとも取れる建造物が立ち並んでいる。観光客の立ち入りは少なく、通路を丁寧にたどっているのはアランしかい

ない。

アランは端末を操作し、地図を映した。立体地図には迎賓館がマーキングしてある。徒歩で建物と周辺に広がる人工湖を見ながら迎賓館に向かった。

迎賓館は奥側の官邸の手前にあった。白い柱を円錐状の建物に張り付け、屋上にかけて花びらを意識して開く形で曲げた構造になっている。奥にある官邸から先の、町の構造でいえば鳥のくちばしにあたる部分は王宮となり橋を通して立ち入りできない構造になっている。

迎賓館の前は警備員の詰め所があり、監視をしている。

アランは内心で捕まりやしないかとぼやきつつ、迎賓館に近づいた。

警備員達がアランに近づいてきた。「立ち入り禁止エリアだ」

「貢物を持って来いと、ミリガンと名乗る男から依頼を受けた」アランは昨日老人からもらったカードと、自分のカードを警備員に差し出した。

警備員はカードを裏返して眺めた。半透明のキチン質のカードの中にスプレア王家の紋章が透けて見える。王家の人間が直に渡すカードだ。判断に困り、端末を取り出して通信を入れた。「すまない、ミリガンと名乗る男から依頼を受けたと、男が1名迎賓館に来ている」アランのカードを端末に重ねた。アランの身分が浮かぶ。通信先へ転送した。

『判断を待て』暫くしてデータが転送してきた。ミリガンとアランの身分が映った。

警備員はアランの方を向き、2枚のカードを返した。「中に案内する」警備員は迎賓館の中に向かった。アランは後をついていった。

迎賓館の内部はドーム状になっており、白の大理石を基調とした構成になっている。壁には彫刻が掘ってあり、天井はステンドグラス状になっていて日の光が入り込む。2メートル以上の扉が壁に張り付いている。

警備員は廊下を歩いていき、地下への階段へと足を踏み入れた。迎賓館は来客を待たせるための場所であると同時に、王宮をはじめとする各施設への入り口を兼ねている。

アランは警備員の後をついていった。地下へと進み、廊下に出た。

廊下は床が黒みがかった茶色で、白い壁は天井から釣り下がった照明により黄色く染まっている。彫刻で美しく着飾った迎賓館の面影はなく、無機質な印象を与える。

警備員は廊下を進んでいき、広い空間に出た。先にはゲートがある

。ゲートの前に衛兵が複数立っていた。「貢物を」

アランは警備員の一人に口座を下したカードを渡した。「現金だ」

警備員はカードを受け取り、読み取り機の上に置いた。データを読み取り、中に入っているデータが多重に映る。内部に入っている金と流通経路が露になる。警備員は内容を確認した。

「了解しました。案内に従って奥の部屋に入り、着替えてから王の前に向かってください」

アランはゲートの前で待った。衛兵が先にゲートを通った。

「案内します」衛兵の一人がゲートを通った。

アランは警備員の言葉に従い、ゲートを通り先へ進んだ。何も反応がない。衛兵は先へ進んでいき、アランは後をついていく。

廊下を延々と進んでいき、一つの扉の前で立ち止まった。「部屋の中で荷物を置き、正装に着替えて下さい」

「何も持たなくていいと」

「所持品一つでも人を殺せますから」

「荷物を盗む輩がいるかもしれないが」

「客人の所持品を盗むとは、信頼に関わります。王より触れてはならぬと命令を受けています。ご安心下さい」

「アランは衛兵の言葉に従い、扉を開けて中に入った。

中は迎賓館と同じく壁はアクリル張り床はタイルとなっている。堀が入っている映像が壁から映っていて、一見して彫が入っていると錯覚する。実際には透明なアクリルガラスを通して監視カメラが内蔵してあり、壁中から見渡す構造になっている。隅には机とカゴが置いてあり、奥にはクローゼットがある。アランは荷物を机に置き、クローゼットを開けた。真っ白なローブが入っていて、下には下着が折りたんで入っている。

アランは苦笑いし、服を脱いで下着から着替えた。ローブを着た修道士の恰好で、サイズが丁度良かったのに驚いた。ゲートを通る際、体格を計測していてちょうどいいサイズの服がある部屋に案内していたのだと分かった。脱いだ服は丁寧に畳んで服を入れているかごに入れた。上着やズボンはローブや服をかけていたハンガーに丁寧に掛けてしまいクローゼットをしまった。部屋を出た。

衛兵はアランの恰好を確認し、腰につけている探知機を取り出してほこりを払う感覚でアランの周りで振り回した。清掃に異物を隠していないかを確認している。何も反応がない。

「王の間に行きましょう」衛兵は先へ進んだ。アランは服の冷たい感触に違和感を覚えつつ、衛兵の後をついて先へ進んだ。

廊下とエレベーターを辿り、地下通路を経由して王宮に入った。ホールには見学者でごった返していた。アランと衛兵はホールの脇にある専用通路を通っていたために見学者と交わずに王宮内のエレベーターホールに立ち入った。

エレベーターホールは文字通りのホールとなっていて、壁や天井が真っ白な空間を作り出している。専用の装飾が付いた王族専用のエレベーターが一基だけ設置してある。

衛兵はエレベーターの前に手を触れた。センサーが反応し、音を立ててエレベーターが降りてくる音がした。やがて機械の歯車が急停止する音が響き、ドアが開いた。

「大丈夫なのか」アランは不安げに衛兵に尋ねた。

「1度も壊れていません。毎日整備しています」衛兵はエレベーターに乗った。

アランは衛兵に続いた。エレベーターのドアが閉まり、上昇した。

エレベーターの内部も真っ白な壁と天井で固まっていた。床は大理石で灰色がかっているが反射や人の見方によっては白にもなる。アランは余りの眩しさに目を細めた。

「王というのは金を納めればすぐに会える。世界一高い博物館の展示物だな」
「人の上に立つ人間はお飾りですよ。暇を持て余すか遊びに行くかしか仕事がないのです」
「書類にサインをするだけの仕事だからな」アランはぼやいた。周囲が有能であれば何も指示を出さずとも完結してしまう。無能なら無能で勝手にやっているのでもしなくていい。人は上に立てば暇になっていく。

エレベーターが止まり、電子音が鳴った。扉が開いた。

衛兵はエレベーターを降りた。アランが後に続いた。

先は大理石を基調とし、中央に赤いじゅうたんを敷いた通路になっている。正面の突き当りに両開きの扉がある以外に扉はない。壁の所々には天井から黄色い電灯がぶら下がっている。

「王は寛大ですが、立場をわきまえてください」

衛兵は扉に向かって歩いていく。アランは後をついていった。

扉の前に来た時、自動で両扉が開いた。

100平方メートル程の薄暗い空間がある。窓はあるが閉め切っている上にフィルタが張り付いていて光量に制限をかけている。周りには衛兵が並んでいる。じゅうたんが敷いてある先に段差があり、上がった所に玉座があり、ヴァンプが座っている。玉座の横にはコンソールが内蔵してある机が置いてある。玉座の前は透明なアクリル板がささぎっており、不意の事態に対応できる状態になっている。

「アラン＝グレイザルです。お連れしました」

『ご苦労』合成音声がかかった。

衛兵は頭を下げ、他の衛兵と同じく窓の位置まで下がった。

『多忙な中でよく来てくれた。感謝するよ』

「お互いに暇だから会えた、の間違いではないですか」

衛兵達はアランの言葉に眉を動かした。

ヴァンプは笑った。『お前の言葉通りだ。特に議会の力が強まれば書類にサインをし、要人に笑顔を振りまくだけが仕事になる。人の上に立つとはいかに無責任に墮落するかを痛感するよ。話というのは使いのミリガンから聞いているだろう、ニウテラの状況について知りたいのだ。理由は言わずとも分かるよ、政局の素人である君の予想通りと言っておく』玉座の横にあるコンソールに手を伸ばし、操作を始めた。アランはヴァンプの手を見た。手の形状から何かを察した。

周囲に立体映像が映る。ニウテラに関する情報が映っている。

アランは映っている情報を一通り見た。自分がルガー＝セイロにいる間の日付も入っている。

「失礼ですが、自分が保有している情報よりも正確、かつ丹念に収集しています。お話しする内容はないとみえています」

『所属不明のミスと交戦したと聞いている。実際の感触を聞きたい』

「相当な反応速度です。通常ミスで反応速度を上げれば過剰なまでに繊細となり、扱う者を選びます。集団で襲ってきたとなれば相当な訓練を受けているクォーターが乗っているか、反応速度を上げたシステムを搭載しているかです」

『通常ミスでは太刀打ちができない』

アランは返事を返さなかった。自分が破壊したのだから戦えないのはうそになる。かといって性能が違うので他のミスで戦った場合の結果は分からないとしか結論が出ない。

映像が切り替わり、ガルキアがニウテラの現状を映した内容になった。『現在はガルキアが保護していると公表しているが、我々や複合体は占拠と判断している』

アランは顔をしかめた。ガルキアが駐留する理由は言うまでもない。技術の確保だ。技術を確保して何をするのかまでは理解できない。スプレアや複合体にアドバンテージを得たとしても複合体以外で最強の兵器であるミスの製造を行うのは禁止となっている。兵器としての技術を別の何かに転用するのが目的だとしても、兵器は殺戮と破壊以外に用途がないので平和利用には分解を含め手間がかかる。取引で他の技術を取り入れた方が効率がいい。「成果物が目的ですか」

『知っているのか』

「神の棺計画は、自分も重大な駒の一つなので知らない方が不自然でしょう」

『成果物は複合体を含め、各勢力が探している段階だ。手がかりを知っているか』

アランは首を振った。

ヴァンプはうつつむいた。『分かった。ニウテラを知る君も知らないとなれば、他に当たっても無駄だろう。回収したと間者を含め知らせがないのだから、未だ見つからないのが幸いだ』

「でしょうね、回収したとなればパワーバランスが崩れます」アランは平然と言った。神の棺計画における重大な成果物は富豪のジョーカーと同じく、一発で戦局を覆す平気だ。野心ある者に見つかればいかなる使い方をするかは予想できる。

『君が知っていれば先に動けたのにな、時間の問題か』

「時間、ですか」

ヴァンプはうなづいた。『ラッセル市長が亡くなったと知らせが入ったんだ』

アランはヴァンプの言葉に驚いた。

ウィンドウが現れ、ラッセルの死についてガルキアからの声明が映った。食事のために拘束衣を解いた時、衛兵から銃を抜き取り即座に頭を打ちぬいた。手当をしようにも銃弾は脳髄を貫通して即死を確認したと記してある。

別のウィンドウが開き、ラッセルの遺体の写真がある。血液や傷は処理済みとなっている。捏造を疑う者がいるため、証拠として撮影し公開したと見える。

『ガルキアとしては脳から記憶を吸出し解析するだろう。成果物の場所をつかむ可能性が高い。進軍を前倒しする必要がある』

アランは気難しい表情をした。ラッセルは自らの死をもって歯車を動かしたと判断した。

「ガルキアへの対処は」

『報復を望むか』ヴァンプはコンソールに目をやった。

映像が切り替わった。ハンスが持ち込んだミスの解析結果だ。

アランはハンスが無事、マイスを解析したのに安堵した。「情報の出元は」

『複合体だ』

アランは映像を見て、他のマイスと構造が異なるのに気付いた。「例の所属不明のマイスですか」
ヴァンプはうなづいた。『他のマイスと構造が違うのは君の指摘通りだ。最初に生産したグルパスを
発展した構造を持つと、複合体は答えている』

「グルパスと同系統か。設計思想は古いんだな」

『技術に古いも新しいもない。状況に最適化できているか否かだけだ』

「ごもっともです」アランは適当に答えた。古い技術が新しい技術を駆逐するとも、逆もまたあり得ない。

『君の話やデータから、別系統のラインで製造しているマイスだと分かった。ニウテラで使用しているモカラとも、フリーのクエンターに供給しているマイスとも異なる。ガルキアと共同で調査をする必要があるが、ガルキア交戦データを含め一切を公開していない。君やクエンターがデータを運び出し、経験を語るまで実情を知らなかった程に我々は無知だ』

アランは黙った。慎重論をとれば様子見を選ぶのが妥当だ。

『複合体としてはマイスの出元が我々とガルキアの双方にあると疑っている。正直に言えば、我々が襲撃に関与していない証として、ニウテラに兵を進めると圧力をかけているのだ。仮に進軍すれば緊張が高まり、最悪ニウテラの人々を人質として殺害するやも知れん』

映像が切り替わり、ニウテラ周辺の地図が映った。ニウテラのスプレア領側に部隊が展開している構図となっている。

『ニウテラの成果物は神の棺計画に必要な道具だ。奪われるならまだしも、表に出る前に関係している人々を潰すのは計画の頓挫を意味する。事態が悪化する前にニウテラに入る必要が出てくる。入れればガルキアは侵犯を理由に人質となっている人々を殺す。もしくは交戦すると言っている』

ヴァンプは玉座を立ち、ひざまずいた。衛兵達も一斉にひざまずいた。

アランはヴァンプの行動に驚いた。

『スプレアは内部抗争の折、確保できる正規のマイスとクエンターの総数に不足がある。技量で補うにしても不明のマイスが介入してくれば生き残る自体に無理が生じる状態になる。故にアラン、君に我々の指揮下で進軍する部隊に入ってもらいたい。無論、小隊長待遇でだ』

アランはサイアスの言っていた仕事の意味を理解した。動乱になるのを予測していたのだ。

「王。先程の言葉は裏を返せば、成果物を回収すれば用済みなので人々を殺しても良いとおっしゃるのですね」

ヴァンプは黙った。ニウテラに駐在していたアランの逆鱗に触れたと気づいた。

アランはヴァンプの表情の変化から状況を察した。「怒りはしません。仮に成果物を回収した場合、事情を知らぬ子供達を助けてはもらえませんか」引っかかっている内容を話した。

ヴァンプは立ち上がった。王の状況を見て、衛兵達も立ち上がった。

『子供だけでもか』

「事情を知らぬ以上、地獄を与えるだけです。自分は人である以上、見過ごすわけにはいきません。依頼を受ける条件です」アランは言い切った。無理な頼みなのは分かっている。本来は回収次第処分するのが前提だ。人である以上、何も知らない人を殺すのは無意識にためらう。助ける手段を持ってすれば、心は落ち着く。

ガルキアの国王は立ち上がり、コンソールを操作した。ニウテラの都市概要と年齢分布、周辺地図とウマポウンチの都市概要が映った。『一番近い都市のウマポウンチは急激すぎる発展の余り、周辺区域にスラムが発生している。今の状況で子供が一気に難民としてなだれ込めば更に悪化する上に準備期間も手続きをとる余裕もない。君の頼みとはいえ、受けかねる』

アランはヴァンプの言葉に諦めを覚えた。言っている内容は至極当然だ。いかなる国といえど、難民を無償で受け入れる環境を作れといえれば嫌がる。「自分はニウテラに駐留していたとはいえ、フリーのクエンターです。集団統制や指南に無理があります。条件を受け入れないのはやむを得ないと判断しました。依頼は持ち帰り検討の上、ミリガンに報告します」

『複合体への返答は一ヶ月後と決めている。編成を考慮する故、2週間以内にミリガンに返答し、手続きを取るといい』

アランは頭を下げた。

衛兵の一人はアランに近づいた。「ご退室を」扉に向かって歩いていった。

アランは衛兵に付き添う形で扉に向かった。ドアが開き、アランと衛兵が出ていった。扉が閉まった。

衛兵達はアクリルガラスを通して、王の前に列を作った。

「クエンターの分際で王に要求を突きつけるとは、とんだ不届き者です」衛兵の一人が声を上げた。

ヴァンプは手のひらを出した。『アランは只のクエンターではない、神の棺計画の元で創成した複製不可能な駒だ。自我を持ち、自らの判断で望むな』ヴァンプは淡々と言い、コンソールを操作した。映っているウィンドウが一斉に閉じ、代わりにガルキアへの直通回路に接続しているウィンドウが浮かんだ。

衛兵は浮かんでいるウィンドウを眺めた。暫く経った。回線がつながりアナウンスが流れる。間もなく回線が開いた。立派な装飾の壁を背景にルイスのバストアップが映る。

『ガルキアの女王、至急の通達があり連絡をした』

『宣戦布告ですか』

『近いな。複合体との会見の結果、我々はラッセル市長の死を持って、ニウテラへの進軍をやむを得ない方針として議案に提案する。可決次第編成し近いうちに進軍を行う』

ルイスは顔をしかめた。ラッセルの死を公開すればスプレアは手がかりを失ったとして成果物の調査が不可能と判断すると判断すると議員からの提案があり、自分も同じ結果になると予想していたからだ。実際には逆の方向に進んでいる。

『市長の記憶は死後も取り出せる。神の棺計画で行ったのと同じく。解析すれば成果物の回収が現

実となる。本来の使用用途であれば誰が使用しても構わないとなっている。無論君達が使用しても違反ではない。だが、国家が回収したとなれば目的外の使用もあり得る。防がねばならない』

ルイスは驚いた。記憶を取り出したとしても主観としても内容の上、忘れていた可能性もあるので効果は薄い。いくら暗号を取り出して解析できなければ只の記号だ。

『反論はないな』

『私達が成果物を回収するから、阻止のために進軍しスプレアが回収すると。なら貴方達も同じ行為をすると認めているのと同義です。貴方達が目的外に使わないという証拠があるのですか』

『危険な代物を承認なしに使えば、議会は荒れて支持は下がる。国家を背負う者として、民の不信を買うのが何より恐ろしいのは分かっているだろう。私の国を見ればな』

ルイスは黙った。

『計画では居住する物は処分する手はずになっている。利用価値以外に保護する理由はあるのか。戦闘が起きれば自分達の側に難民として引き入れる気か』

ルイスは何も答えない。民を助ける為に保護の名目で占領したのか、単に成果物を見つけるためだけに自分のフィールドとして確保したのかが理解できていない。保護の主導は議会であり、自分は単に印を押しただけの飾りでしかない。

ヴァンプはルイスの表情からして状況を察した。自分以上に権限を持つ国家の長でありながら、自分以上の飾りとなっている。更に言えば駒としての自覚もない。上に就く者としては最悪の存在だ。

『分からないなら構わん。お前が保護している以上、交戦状態になった場合はガルキアの責任として難民を含めた処理を押し付ける。いいな』要求を突きつけて回線を切った。

『無知にも程がある。執政を司る者の立場か』ヴァンプは一息ついた。

衛兵はヴァンプの方を向いた。

ヴァンプは玉座から立ち上がった。『次の公務に入る。清掃班を入れろ』玉座から去っていった。

衛兵達は頭を下げ、一人は扉を開けて出て行った。

アランは衛兵の案内で元の場所に戻り、着替えてからゲートに戻った。

衛兵が別れ際にカードを差し出した。「王の命令だ、貢物の差分を返す」

アランは何も言わずにカードを受け取り、端末に重ねた。2000万バルが入っている。

「随分と気前がいいんだな」

「王に言ってくれ」

アランはゲートから去り、迎賓館を後にした。胸ポケットから黒く半透明なカードを取り出した。中央から赤い光を放っている。ヴァンプの話は本当だと確信した。リミットは外れたが使い時がない。

日は頂点に達しており、暑さもピークになっていた。執政区域を出ていき、市街地に入った。観光地の近くなだけに商業ビルやホテルが立ち並んでいる。

高層ビル群を見回し、一つの店の中に入った。上品なレトロさをイメージしたカフェで、多くの人でごった返している。アランはカウンターに向かい、コーヒーを頼んでカードを差し出した。

店員はカードを受け取り、コーヒーとともに差し出した。

アランはコーヒーとカードを受け取り、空いている席に着いた。端末を取り出し、机の上に置いた。浮かび上がるキーボードをたたいた。ウィンドウがいくつも浮かび上がった。内容はニュースやメールの類だ。アランはキーボードをたたき、複合体のメールリストを出した。アリスのメールアドレスを出し、難民に関する内容を打ち込んで送信した。交戦状態となれば無意味に犠牲を増やす羽目になる。成果物回収を含め、最小限に留める必要がある。また事情を知らない子供達をも巻き込む訳にはいかない。コーヒーを飲み干し、冷たく閉ざした空気に浸った後に去っていった。アリスの返答をもってして、難民への対処を決める。予想は無理だと分かっている。複合体といえど、処分を前提とする民を保護する技量はない。規則で決まった内容を覆すには、規則を作り直す必要がある。特権を持つ者といえど例外ではない。

翌日のガルキアの議会ではルイスの来賓の元、スプレアの進軍への対応についてもめていた。交戦派は成果物のダッシュを目的としているとし、声を荒げる。慎重派は複合体やスプレアを敵に回さない為に明け渡す必要があると説明する。互いに共通しているのは成果物が見つからない状態での対処で、街の人々の証言は余りにも適当な上、手掛かりを知るであろう市長のラッセルが死亡したために不明のままとなっている。

議会の上には昨日、ヴァンプとルイスの会見の様子が映っている。戦闘は免れないとみる交戦派が勢いを増して、慎重派が及び腰となっている。

ルイスは議会の様子を見て、眠気を覚えた。

近衛兵の一人でルイスと同年の少女、ニケはルイスの元に近づいた。「女王」

ルイスは我に返った。「すみません」

「私こそ失礼をいたしました」ニケは引き下がった。

ルイスの目の前のウィンドウでは、保護と交戦について議論を交わしている議員の姿が映っている。外部からのミスではなく、隣国が攻めてくるとは予想していなかった。

3時間ほど経った。議論は軍に委任するか否かの対処に移っていた。議論は行き詰まり、議長が木槌をたたいて一旦休憩に入った。

ルイスは近衛兵と共に退席し、控室へ向かった。

控室のドアが開いた。

「ニケ、入りなさい。話があります」

ルイスは控室に入った。ニケは後に続いた。ドアが閉まった。

他の近衛兵はドアの前で待機した。

ルイスとニケは控室に入った。机といすが置いてあるだけの簡素な部屋となっている。窓もない。

ドアが閉まり、ルイスは席に座った。ニケは隣についた。

机にメニュー画面が浮かび上がった。ルイスは操作し、部屋を自然があふれる公園の立体映像に切り替えた。

「ニケ、貴方に質問があります」

「はい」ニケはかしこまった。

「スプレアと交戦した場合、勝てると思いますか」

ニケは黙った。返事のしようがない。

「交戦しても勝てやしません。複合体が絡んでいるのです、そもそも所属不明のミスから守るための保護であれば、明け渡すのが本分なのですが議会は動きません」

「ニウテラにしかない技術を守るためです。正規兵が逃げ出した以上自分達が保護するのだとフェルナンド議員がおっしゃっていましたよね。なら仕方ない面があります」

ルイスは黙った。ニウテラが中立都市として、ミスをはじめとする重工業の技術を開発しているのは知っている。基礎技術の発展が国家基盤となっているガルキアにとって、否応なしに欲しがるのは当然だ。しかし強大な力には巨大な犠牲がつきものになる。

「所属不明のミスは技術独占を狙った勢力なんでしょう。なら交戦で混乱している時に襲ってくるかもしれません」

ルイスは眉をひそめた。技術を奪ったとしても使いこなせる人間がいなければ何の値打ちもない。複合体もガルキアもニウテラの技術を求める理由はない。現状の技術発展と国家の維持で手一杯だからだ。進軍は中立都市を保護しているガルキアへの疑念が原因であり、技術目的ではない。グリンゴにしても自分達の領土から離れたエリアを襲撃する意味はない。仮に成功したとしても、ミスの製造どころか設計もできないのもてあますだけだ。では襲撃したミスとは何か、に戻る。結果だけ見ればガルキアが確保し技術提供を受ける可能性がある。受けた場合は国家の祖技術が向上し、クワンターから離れた独自の防衛計画『光の盾計画』が実行する。

「まさか」ルイスは声を上げた。犯行とは一時の感情で動くのを除き、行為の結果得をするから行うのだ。ミスの襲撃でガルキアが得をしたとなれば、行うように仕向けたのは他にない。アリスの言葉通りなのか。

「いかがしましたか」ニケはルイスに話しかけた。

「議会在終了次第、アーカイブに行きます」ルイスは席を立った。

「何をおっしゃるのですか、議会は夜間までありますよ。終わる頃には閉まっています」

「仮定を立証する必要があります、無理なら開けるよう交渉するまでです」

ニケはルイスの言葉に驚いた。「立証って、疑問なら誰かに聞けばすぐに分かりますよ。今までの質問なら覚えていますから大丈夫です」

「誰かに聞かれてはまずい仮説です。議会在終了進軍が始まるまでに立証する必要があります」

ルイスは机に浮かぶメニューを押した。立体映像が消えた。ドアに向かってかけていった。自動で開き、出て行った。ニケは後をついていった。

議会の控室は宴会場と変わりなく、部屋の端から端まで伸びるテーブルに豪華な食事がビッフェ形式で並んでいる。窓から見える景色は夜間になっているものの、超高層ビル群や公園を照らす明かりが暗闇を照らし、綺麗さを演出している。議員は会派や党を問わず飲食物を取っては食事をとり、他愛ない会話で盛り上がっている。

フェルンドは窓の外を眺めている。

「フェルナンド議員」議員の一人が話しかけた。

フェルナンドは声が出た方を向いた。「用件でも」

「ニウテラの防衛ですが、相手がスプレアと複合体の連合となればあっという間に滅びます。成果物の回収も解析も出来ていない状況なら、手放すのも手段ではないですかね」

フェルナンドは端末を取り出し、操作した。空中にウィンドウが映った。「手放せば計画に支障が出るよ。成果物は餌なんだからね」

議員は驚いた。「餌ですか」

フェルナンドはうなづいた。ウィンドウには光の盾計画のあらましが書いてある。正規兵と異なる形での編成と

ミスの開発プランについて書いてある。

「成果物を奪われたくない一心で、奴らは攻めてくる。我々は全力で防衛する。光の盾計画は最重要といえど実際に有効なのかは計測しかねる。故にテストをする必要があるんだ」

「テストのためにニウテラを利用すると」

フェルナンドはうなづいた。「ジェイクジブラスのミス呼び寄せ、配備するよう軍に申請する。計画のデータ取りだ、喜んで了承する。根回しも十分出来ている」ウィンドウが切り替わり、ジェイクジブラスに配属しているミスの姿が映る。見た目からしてグルパスに近いが、異なった形相と設計思想を持つ。

「奴らの実働を見る必要がある。良好であればガルキア独自の防衛計画の有効性を確認できる。例え成果物がなくともデータは確保し、国家を強固にする足がかりに出来る。戦局に関わりなく得になるって訳だ」

議員はフェルナンドの言葉に驚いた。「彼らについて、女王は知っているのですか」

フェルナンドは首を振った。「いいや。単にテストをするために保護しているとみなせば、女王は怒りだして明け渡しを実行するよう仕向けるだろうね。街の人々の意向を無視するのかとね。だが人の気持ちを考えて政治なんて出来やしない。政治とは今の人間のためではない、未来の人間のためにやるものだ。場合によっては人の命や街すら数値として扱わないといけない。今回は未来の国家増強のため、ニウテラを差し出すって訳だ」

議員はうなづいた。

女性の議員がフェルナンドに近づいてきた。「面白そうな話をしているのね」

「聞いてたのか」

女性議員は首を振った。「かじった程度にはね。ジェイクジブラスのクワンターは、ガルキアが育

成した最強の尖兵と聞くわ。成功と言わずとも、拮抗すれば女王陛下も押し進めましょう」
「光の盾計画のためにも、攻めてもらわないと困る。データ取りを目的にワザワザ、
ウィンドウが切り替わり、光の盾計画が実行した場合の軍事関係者の割合が映った。貴族とよそ者
扱いとなっているクォーターの割合が減り、代わりに軍事専門者の割合が増えている。
「計画が進めば生まれながらにしての軍事関係者のみが防衛に当たり、貴族の金銭や人材負担や平民
の不満も減りましょう。我々にとって得な内容はありません」女性議員は大笑いをした。ジェイクジ
ブラスでマイスの確保を続ければ、ノブリス＝オブリージュで貴族が軍人として前面に出る必要も、
よそ者でありながらチンピラの如き振る舞いをする金食い虫のクォーターを雇う必要も、両者の横柄
さに不平を漏らす平民もいなくなる。メリットしか無い計画だ。
「でしょうね」フェルナンドは女性議員に合わせて笑った。女性議員を含め、議員達は光の盾計画を
ジェイクジブラスで幼少時より軍事のスペシャリストを育成する計画だと認識している。医療都市
ジェイクジブラスにあるマイスをワザワザ運び込むには理由がある。保管しているマイスは皆、計画
が分岐する前に、国家の目的ではなく別の目的でクォーターと共に創成した存在だ。成果物諸共供出
するのがベストだが、見つからない以上は片方を出すしかない。複合体の報告から分析しても、2つ
の計画は本来の目的を外れているが故に半端になっている。今すぐにでも取りまとめなければ国家ど
ころかナルオンの未来はない。本来の計画は先代の王の遺志により根本を司るジェイクジブラスに封
じてある。当時の近親者以外に知るヨシはない。無論、女王といえどもだ。

一週間が経過した。

アランはホテルのロビーにあるカウンターでくつろいでいた。白と青を基調とした席は窓に設置し
てあり、先には堀の光景が見える。
複合体に難民について質問状を出した結果が届いた。机の上に広がっているウィンドウには返答が
映っており、一切関与しないとの内容だ。表向きではスプレアとニウテラを保護するガルキアとの問
題としており、難民が現れたとしても保護しきれず、設備も確保出来ないと言いつづけている。

男がアランの隣に来て座った。「随分探したぞ、豪華な場所に泊まりやがって」

アランは男の方を向いた。目が合った「サイアス、お前か」

「久しぶりだな、家は見つかったか」

アランは首を振った。

サイアスは残念そうな表情をした。「不動産屋に案内し忘れたか、散々言っただけのによ。忘れっ
ぱいから、きつく言っとかねえとな」端末を取り出し、机に置いた。メニュー画面が浮かび上がった。
アランはサイアスの行動に疑問を持った。「何が目的だ」

「身構えるなよ、ちょっとした土産だ」サイアスはメニュー画面からデータを展開した。ストリー
ムの波長を立体で示したグラフと地図、写真が次々と開いていく。「ルガージ＝セイロで消失した高エ
ネルギー体に似た反応が、ジェイロンで出た」

アランはサイアスが開いたデータを見た。地図は南方の端にあるジェイロンを示している、スト
リームのグラフも高エネルギー体の反応と重ねていると異なる部分があるものの、似ているのが分か
る。「今の状況は」

サイアスはアランの反応を見て笑みを浮かべた。食いつきは予想通りだ。「ジェイロンのベンデル
クトーク隊が発見して交戦した。マイスに似た人型兵器じゃなくて巨大なフローターみたいな奴だっ
たって話だ」写真を前面に出した。ニウテラから2500キロメートル以上離れた山岳地帯で空に浮
かぶフローターらしき機械の物体を撮った写真がある。解像度は低くぼやけているが人工物なのは分
かる。もう1枚の写真は山岳地帯にある箱をつなげた印象のある迷彩を施した四脚のロボットが写っ
ている。砲を装備していて、一見して装甲で関節部分を固めて堅牢に見える。

「動物に似ているマイスだな」

「マイスとは違う、単なる作業用の重機って聞いた。フローターに搭載してる奴で、何かしらの作業
をしていたとも聞いている。交戦して部品を回収したが、巨大フローターは即座に消えちゃったって
話だ。近々複合体のアーカイブスにも載るから、詳細見たけりゃ暫く待つんだな」

アランは顔をしかめた。「情報の出処は」

「行きつけの酒場には情報が集まりやすいんだ」サイアスはアランに顔を近づけた。「実際には各区
域に調査員を派遣してるんだ」

アランは机に乗せてある端末を手に取り、ズボンのポケットに入れた。

「出るなら気は早いぜ。ニウテラの進軍で、ガルキア側のジェイロンのベンデルクトーク隊にも交渉
をかけてる。一部は合流を決めてる」サイアスは端末を操作した。表向き複合体を介して依頼を出し
ていて、ロゴに複合体のマークが入っている。進軍に参加する雇兵のリストが浮かび上がった。スプ
レア出身のクォーターが多いが、一部ジェイロン出身の者もいる。

「ガルキア側の人間が、スプレアのために動くのか」

「奴らは複合体の雇兵だ。ガルキアだがスプレアだが関係ない。奴らは集団戦闘のエキスパートだか
らな、進軍の現場指揮官として呼ぶんだらう」

アランはサイアスの言葉うなづいた。ベンデルクトーク隊はグリーンゴや盗賊を始めとする襲撃か
ら防ぐのと同時に、空白地帯の調査を行う独立部隊だ。集団戦に長けているので密集戦では指南役と
してお呼びをかける組織もある。

「ついでに王から話があってな、やっぱり難民は救えないとさ」

アランは端末を取り出し、机に置いて起動した。メニュー画面が浮かび上がり、複合体に関する内
容を取り出した。ウィンドウが切り替わり、仕事のリストが現れた。ニウテラへの進軍に関する依頼
はない。複合体は表向き直に関わらない。「お前は出るのか」

「正規の兵士はバイトでも無理だ。民間の指示だな」

「雇兵のみの部隊か、珍しいな」アランはぼやいた。フリーのクォーターは汚れ仕事を前面に出る場合も多く雇用する。正規兵が関わっているとすれば国民の支持に影響するからだ。雇兵のみで本来正規兵が行う進軍を行うのは珍しい。ニウテラに係るのは相当デリケートな問題と見える。

「進軍の依頼を受けるのか」サイアスはアランに尋ねた。
アランは複合体から出ている依頼の一覧を見ている。ガルキアから1か月の期間で主要拠点防衛の依頼が出ている。詳細は伏せているがニウテラで間違いない。ガルキアも交戦は免れないとして固める気だ。少なくとも戦場になるのは確実だ。計画にない介入で終わりに行くのか否か、自分で確認し見極める必要がある。特異点らしき存在と交戦したベンデルクトーク隊の面々とも話をすれば進展するかもしれない。「受ける。先に進むには他に手段はない、ミルガンの所に行く」端末を切り、ズボンのポケットに入れた。

「ミリガンなら夜にしか来ねえよ、公務が忙しいんだ」
「公務って、年寄りに仕事させてんのか」
「サイン一つするのも苦勞するほどの人手不足なんでな」
アランは渋い表情をした。
「俺を代わりにするのもしないで。俺は下っ端でな、しかも王は疑り深いんだ。ミリガンみたいな側近しか相手にしねえよ」

「王に貢物は」
「暇ならいいぜ、でもいつ会えるかわからねえ。だから王に関わる内容を通すにはミリガンを使うんだ」

アランは机に置いてある伝票のカードを取ろうとした。サイアスがカードを取った。「依頼を受けた特典でおごりにしてやる、出先は」
「不動産屋だ」アランは平然と言った。

夜になった。アランは依頼を取り付けるべく、マーキー＝マーキーに向かった。1週間ぶりで1度しか行ってないが、土地勘があり道順を覚えていた。ドアを開けて中に入ると、カウンター席にサイアスがいた。前に来た時と同じ席にミリガンが座っている。

サイアスはドアを見て、アランに気づいて席を立ち、近づいた。「よお、来たかアラン。律儀な奴だな」

「仕事とあれば真面目にこなさないと、信頼に関わるからな」
サイアスはアランの肩を軽くたたき、ミリガンの方を向いた。「来たぜ、賭けは俺の勝ちだな」
ミリガンはズボンから財布を取り出し、紙幣を2、3枚重ねて出して机に置いた。

アランはミリガンの手を見た。年老いた顔に似合わず若く綺麗な手をしている。サイアスの話では書類にサインをすと言っていたが、両手にペンだこが一切無い。サインするだけで仕事になる程の量ならあって当然だ。

サイアスはミリガンの席に近づき、紙幣を受け取った。「よし、お前ら今日はおごりだ」客達は一斉に喜び拍手で湧いた。

アランはミリガンに近づいた。「アンタ、何の仕事をしてるんだ」

「宮仕えだよ」
「何もしないで金がもらえるのか」アランはミリガンに尋ねた。

ミリガンは顔をしかめた。「何もしていないと分かるのか」
「手が綺麗すぎる。服も酒場にしては浮いているんでな」
「年寄りのやる役人の仕事なんぞ、勤務地に出向いて寝てるだけだ。席についても説教と間違え誰一人として相談に来ない。文字が読めないと思ひ込み書類を一通も渡さん。挙げ句の果てには客と面談しても対等に話も出来ん。何もせず金がもらえるといえれば聞こえがいいが、暇で潰しも出来ん状態ほど辛い時はない」

アランはミリガンの言葉と顔つきから確信した。誰一人として相談に来ないというのは自分より下の人間がいないからで、書類を回さないのは現場で取りまとめを委任しているためだ。立憲君主制のスペアにおいて、表向きに出来る執政はほぼ書類にサインをして来賓者をもてなすだけしかない。ミリガンは何者なのかは仮定したが、口に出す気はない。出せば周りの空気を壊しかねず、人間は位や職に関係なく言葉を吐ける場所が必要なのは分かっている。「王から受けた依頼は知っているな」
ミリガンはうなづいた。

「質問がある」
「難民か」ミリガンはサイアスの方を向いた。サイアスはうなづいた。

「話は聞いている。複合体も無理だと言っていた」
「ガルキアもな」

アランは驚いた。スペアが敵対するであろう勢力に難民について連絡を取るとは予想していなかった。「ガルキアに連絡を取ったのか」

「仲裁をする人間がいない以上、脱出した人間がいた場合の保護は予め互いに交渉する必要がある。最悪の事態が発生した場合を想定し、先回りして優位に立てる状況を作るのが交渉だ」

「となれば、難民を受け入れる勢力はないと」
ミリガンは頷いた。

アランは席に付いた。個人で依頼を出すという案もあったが、安易な正義感で人助けをしても余計に苦しみを与えるだけに終わるのは分かっていた。事情を知らない子供をいくら救い出しても、保護した子供の居住先や手続きは年単位でかかる。国家予算を圧迫する金を毎年出せる程の金持ちではない。孤児院1つを経営するだけで手一杯だ。カウンター席の方を向いた。「椰子の芽のスープとライス。スープは肉抜きで頼む」

「肉が嫌いですか」
「死体の匂いがする」
「分かりました」マスターは調理場に向かった。
アランはミリガンの方を向いた。ミリガンは神妙な面持ちをしている。
「依頼を断るか」サイアスはアランに尋ねた。
「もう一つ質問だ。ジェイロンで高エネルギー体と交戦したベンデルクトーク隊がスプレアに参入すると聞いた。本当か」
ミリガンはサイアスの方を向いた。サイアスはアランの隣の席に付き、端末を取り出してミリガンに渡した。端末を受け取って操作した。メニュー画面からリストのウィンドウが複数浮かび上がる。リストを鋭い目つきで確認していく。
アランは、端末の操作しているミリガンの手つきを見て僅かな笑みを浮かべた。ヴァンプがコンソールを操作する手つきと似ている。仮定は正しいと認識した。
「周りは内部抗争の同志だったのか」アランは声を上げた。誰でもいいから聞いてくれれば良かった。
マスターがスープとライスに乗った皿を持ってアランの元に来た。「よくお分かりで。勝者敗者を問わず終わった後に解散しましたがね、気兼ねなく話が出来るところは必要不可欠だね。今でも仲間が集まっているんですよ」アランの元に皿を置いた。
アランは周囲を見回した。前に来た時と客は変わっていない。現在でも存在しているとなれば内部抗争で勝者に回った党のアジトが酒場になった場所だ。サイアスも、目の前にいるミリガンを名乗る王も党に属している。
ミリガンはデータのリストを映した。「ニルス＝ハインドを知っているか」あらんにはデータを見せた。ニルスのデータが写っている。
アランは驚いた。ジェイロン方面に派遣しているベンデルクトーク隊の中でも歴戦のクォーターだ。グリゴの出身で土地勘も詳しい。
「まさか、参戦するのか」
「新人の実戦訓練にちょうどいいと交渉に応じてくれたよ」
「高エネルギー体が現れて交戦したと聞いたが」
ミリガンは端末を操作した。映像データが浮かび上がった。映像データは昼間にサイアスが見せたデータと似ているが異なっている。四脚のロボットの集団と交戦した映像で、ロボットの砲から砲弾や機関砲の弾丸が飛んでいるがマイスの防御障壁の前では意味をなさない。マイスが牽制として発射したエネルギー弾が当たり、装甲を貫通していく。ロボットは引き下がり、スモークディスチャージャーを放って煙幕を発生している。
アランは眉をひそめた。「グリゴの兵器か」
ミリガンは端末を操作した。動画が停止して別のウィンドウが開いた。破壊したロボットの写真が写っている。内部がむき出した。「報告によると実弾のみの武装で、走破性を考慮しているがマイスの前では足元にも及ばない。スプレアやガルキアにもデータはなく、規格にも合わない独自開発した機体との話だ。噂の異世界の兵器かもしれんが、おもちゃを持ち込むとは間が抜けている」
アランはうなづいた。依頼を受けてニルスと合流すれば話が聞ける。更にニウテラに進軍し約束を果たせるかもしれない。「分かった、受ける。一人暮らしがまともに来た場所だ、戻ってみたい。但しニルスほどの人間が戻るんだ、小隊長ではなく只のクォーターとして扱ってくれ。正直集団戦は苦手だ」スープを口にしたら、シンプルな味が体に染み渡る。
ミリガンはうなづいた。「王に伝えておく。返答は謁見」
アランは口に入れたフェイジョアードを飲み込んだ。「いやいい。着替えるのも、金を下ろす作業をまたやるのは面倒だ。書類で契約書を送ってくれ。複合体に依頼を出してるんだろ」
「伝えておく。手続きを取る仕事が増えると期待したんだがな」ミリガンは残念そうに返事をした。
「昼は相当暇なんだな」
サイアスは笑った。「暇つぶしが出来なくて残念だよな」
ミリガンは鼻で笑った。
「スケジュールは」アランは皿の料理を食べ進めていく。
ミリガンは端末を操作した。ウィンドウが展開し予定表が映った。募集期間は7月半ばまでで、訓練と錬成は一ヶ月となる。進軍の開始が8月半ばから後半と書いてある。
「短いな」
「正直、訓練抜きで集まり次第出撃したいんだがな。お前の言葉通り、フリーのクォーターは集団戦が苦手だ。兵站到使う兵士の招集と補給物資の発注を含めた打ち合わせ、訓練が必要になる」
「長期戦になるか」
「相手次第だ」ミリガンは淡々と言った。
「フリーのクォーターは気が短い。うまく制御してくれ」
ミリガンとサイアスは、アランの言葉に苦笑いをした。
アランはフェイジョアードを食べ終えた。伝票のカードを手に取り、マスターの元に向かい自分の懐からカードと共に差し出した。
マスターは読み取り機でアランのカードと伝票のカードを重ねて読み取った。アランのカードを差し出した。「またのご利用を」
「どうも」アランはカードを受け取り、退室した。
「連絡した通り、面倒くさいが素直な奴だったろ」サイアスはミリガンに尋ねた。
「人である以上、判断に時間がかかるのは必然だよ」ミリガンは席を立った。「駒が自分の元に来たとなれば我々の素直を正当化し、ガルキアに神の棺計画への反逆として圧力をかける理由が出来る。アランと同じく素直であって欲しいと願っている。戦わずして明け渡してくれれば金も命も減らずに済むのだからな」
マスターがアランがいたテーブルに近づき、食べきった皿を片付けた。「アランの指摘通り、明け渡しの交渉をするには余りに短い。かと言って時間を稼ぎ続ければ、ガルキアがニウテラの成果物を

回収する危険がある。引き伸ばしたいが不利になる。難しいですな」

「最悪の事態を考慮する必要がある」

「気にするな、最悪の事態に備えて俺達がいる。内部抗争の時も尖兵やってたしな」サイアスは笑みを浮かべ、自分の胸を軽くたたいた。

ミリガンはかすかな笑みを浮かべ、壁に立てかけてある写真を見た。サイアスを始め、若い頃の同志の集合写真が飾ってある。皆が顔が泥にまみれながらも、屈託のない笑みを浮かべている。

3日後、アランは泊まり込んでいるホテルの一室で端末を眺めていた。依頼の通知が届いた。浮かび上がるウィンドウには、依頼の詳細と行動内容が映っていた。想定している部隊数と割り振りが書き込んであり、ウマボウチに前線基地を張るので向かえと指示があった。

アランはため息をついた。家に目星をつけた矢先にと頭の中でぼやき、席を立てクローゼットに向かい、扉を開けてハンガーにかけてある着替えを手を取った。毎度ながらタイミングが悪い。